

目を覚まし、薄暗い廊下を歩いていくと、調薬室の扉の前にツバメが立っていた。

その手には、発光するガラス瓶が握られている。

フォルに使った、あの薬と同じものが——。

「……なにを、しているの？」

問いかけは、周囲に溶けていく。

振り返ったツバメの目は伏せられていて、表情は読み取れない。

一歩近づくと、彼の指先が震えていることに気がついた。

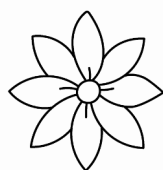
重い沈黙が私たちを包んで、それを破ったのは——ツバメだった。

「俺がここに来た目的は、これなんだ」

「どういうこと？」

「この薬のために、俺は……」

ツバメは手の中で光る薬を握りしめた。



「もう、いいわ」

強風が窓をたたく。

その音がやけに耳に残って。

ツバメの話を聞いた私は。

私は——。